社会学と親鸞―浄土の論じ方
第1回　語られなくなる親鸞？

親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座2022
親鸞仏教センター研究員　宮部　峻

第1回の内容

- はじめに
- 語られる親鸞
- 語られなくなる親鸞？
- プロテスタント的想像
- 近代の親鸞とポスト・モダンの親鸞

はじめに

本講座の概要

本講座の概要

- 親鸞の思想は、近代知識人の関心を惹きつけてきた。社会学者のなかにも親鸞の思想に魅了されたものがいる。彼らは、親鸞の思想を通じて、現代社会の問題を批判的に検討しようとした。

- 本講座では、ロバート・ベラーと大村英昭の親鸞論に注目し、社会学における親鸞の語り方、浄土の論じ方を取り上げる。

第1回の概要

親鸞を語る社会学者

- 近年、親鸞を語る知識人に注目した研究が多く生み出されている。社会学者の中にも親鸞を語る者が少なからずいた。

語られなくなる親鸞？

- しかし、社会学者による親鸞への注目は、1980年代以降、ほとんど見られなくなる。一体なぜなのだろうか？

第1回の概要

第1回の目的

- 今回は、議論の前提として社会学が親鸞、浄土真宗に注目していた時期がどのような時期であったのか、注目された時期が教団改革運動の進展と関連していることを確認する。
- 1980年代以降、親鸞、浄土真宗に対する社会学の関心がなぜ失われたのか、「プロテスタント的想像（力）」というキーワードから考えてみたい。

講師の略歴

宮部峻（みやべたかし）
1991年大阪府生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。
博士（社会学）。専門は、宗教社会学・歴史社会学。
博士論文では、真宗大谷派を事例に、宗教組織の変容過程を分析。「信仰の近代化」と「組織の近代化」という二つの近代化が宗教組織の変容を解き明かす鍵であると主張した。現在も真宗大谷派の改革運動を研究するとともに、靖国問題をめぐる宗教と政治の関係、戦後日本社会科学における宗教理解を学説史的に明らかにする作業に着手している。

講師の研究成果

論文

- 宮部峻，2018，「『宗教』と『反宗教』の近代――1920-30 年代におけるマルクス主義の宗教批判と真宗大谷派教団の応答」『ソシオロゴス』42: 1-17.
- 宮部峻，2021a，「戦後日本社会における『大衆』と『宗教』――高木宏夫の宗教研究の理論的再評価を通じて」『現代社会学理論研究』15: 111-123.
- 宮部峻，2021b，「信仰と組織をめぐる矛盾と運動――戦後の封建遺制論と真宗大谷派の改革運動に注目して」『年報社会学論集』34: 167-177，.
- 宮部峻，2021c，「戦時における教団組織の合理化と教学の再編成――真宗大谷派の組織改革の場合」『理論と動態』14: 66-81.

講師の研究成果

学会報告（2021-22年度）

- 宮部峻，「戦後日本の宗教社会学と浄土真宗――高木宏夫と大村英昭を例に」『日本社会学史学会』，第60回大会，オンライン，2021年6月26日.
- 宮部峻，「啓蒙としての宗教と農村文化――真宗大谷派と農村」『Cultural Typhoon 2021』，オンライン，2021年6月26日.
- 宮部峻，「『成熟社会論』の台頭と宗教界右派の再編――戦後保守政治の転換期としての1970-80年代」『関東社会学会』，第70回大会，オンライン，2022年6月18日.
- 宮部峻，「戦後社会学の親鸞理解――ロバート・ベラーと大村英昭を軸に」『日本仏教綜合研究学会第4回例会』2022年7月16日.

講師の研究成果

博士学位論文

- 『宗教教団の改革運動に関する歴史社会学的研究――真宗大谷派の事例分析』（2021年11月提出、2022年3月学位授与。主査：出口剛司、副査：佐藤健二、白波瀬佐和子、赤川学、西村明）

→要約は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部『博士論文データベース』にて公開（https://www.l.u-tokyo.ac.jp/postgraduate/database/2021/2021thesis-70.html）。

信仰の近代化

信仰運動としての改革運動

- 近代化の波とともに、世界各地の宗教は、近代社会に適合するように変容を求められる。
- 日本では、伝統仏教の一つである浄土真宗、とくに真宗大谷派が、西洋思想・宗教哲学を摂取し、プロテスタンティズムに似た「<u>信仰の近代化</u>」を成し遂げる。

清沢満之（1863-1903）

組織の近代化

行政組織の近代化

- 浄土真宗は、多くの門信徒数を抱え、歴史的に日本社会の意識・構造を規定してきた。
- 民主化の流れとともに、教団内外で前近代的な教団組織改革の要求が強まる。

→<u>信仰と組織という二つの近代化</u>

服部之総（1901-56）

資料『真人』創刊号宣言文

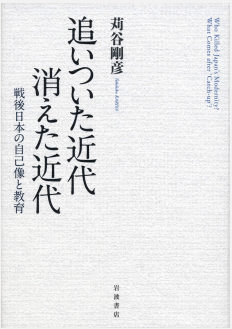
資料　1963年時点での真宗大谷派の宗務機構図
出典：『真宗』1963年8月号6ページ

複数のロジックのせめぎ合い

「宗教」と「民主主義」

- 「信仰の近代化」と「組織の近代化」との間で生じたコンフリクトに注目することによって、近代日本の宗教変容が解明される。
- 真宗大谷派の場合、「**民主主義**」のロジックと「**宗教**」のロジックとがせめぎあい、教団内部での対立が激化することに。

博士論文のインプリケーション



追いつき型近代の終焉

- 真宗大谷派の改革運動は、伝統仏教教団の近代化運動として1970年代ごろまでは社会的に注目を浴びていた。

→「追いつき型近代の終焉」とともに、問いのアクチュアリティが失われる？

宗教の再活性化と社会学

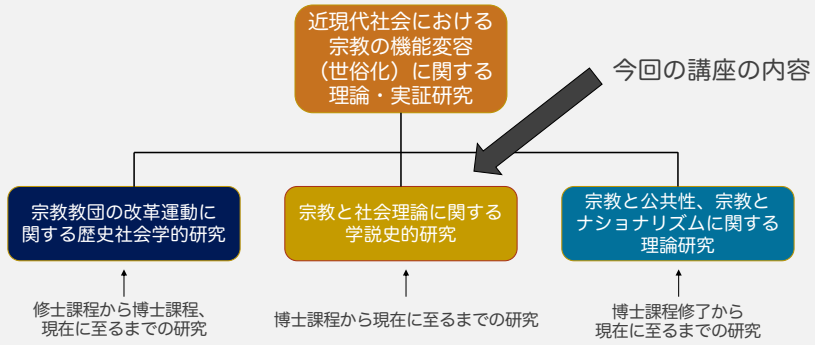
転換期としての1980年代

- 1980年代になると、世界各地で宗教の再活性化が見られるようになる。

→①宗教と公共性に関する理論・実証研究の必要

②宗教と社会理論の再検討の必要

研究全体の概要



語られる親鸞

親鸞には「六つの顔」がある？

語られる宗祖

- 「如来の化身」「法然の弟子」「説法者」「本願寺の親鸞」「妻帯した僧」「『歎異抄』の親鸞」という六つの親鸞像（大澤 2019）

親鸞について「考える人」

「この世」をどのように生き抜くのか

- 日本には、親鸞の生涯や思想を学び、各自の理念や願望を込めて独自の「親鸞」を構想した人たち、親鸞について「考える人」がいた（碧海 2021）。

→「この世」をどのように生き抜くのか、親鸞の言葉を「信じる」のではなく、疑い、批判し、再解釈する営み

親鸞とマルクス主義

マルクス主義の衝撃

- 1920年代になると、マルクス主義の影響が日本でも強まる（「マルクス主義と宗教」論争）。

→マルクス主義を意識しながら語り出される親鸞

「近代」と親鸞を語ること

近代という時代が続く以上、親鸞を語ることに終わりはこないだろう。私たちは、そうした近代の親鸞についての語りとともに、
歴史を超えた親鸞を歴史のなかで捉えるための立場と方法の探究という課題に向かわなければならない。（近藤 2021: 496）

語られなくなる親鸞？

社会学と浄土真宗

親鸞、浄土真宗に関する戦後社会学の代表的研究

- ロバート・ベラー『徳川時代の宗教』（1957年、邦訳は1962年）、『信仰を超えて』（1970年、邦訳は1973年に『社会変革と宗教倫理』、1974年に『宗教と社会科学のあいだ』として出版）
- 森岡清美『真宗教団と「家」制度』（1962年）、『真宗教団における家の構造』（1978年）、『真宗大谷派の革新運動』（2016年）
- 内藤莞爾『日本の宗教と社会』（1978年、ただし、「宗教と経済倫理――浄土真宗と近江商人」は1941年に発表されたもの）

社会学と浄土真宗

親鸞、浄土真宗に関する戦後社会学の代表的研究

- 村上泰亮・佐藤誠三郎・公文俊平『文明としてのイエ社会』（1979年）
- 大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典編『ポスト・モダンの親鸞――真宗信仰と民俗信仰のあいだ』（1990年）、大村英昭『現代社会と宗教――宗教意識の変容』（1996年）

近代化と浄土真宗

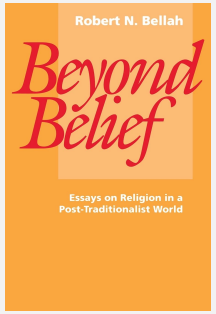
1950-70年代という時期

- 代表的な著作の多くが1950年代から1970年代にかけて出され、戦後社会学を代表する日本社会論の古典であり、親鸞、浄土真宗を起点に日本社会の近代化の要因を探究したもの。

→1980年代以降、社会学で親鸞に言及する研究、浄土真宗研究はほとんど見られなくなる。大村英昭の研究は例外的。
「ポスト・モダン」という言葉！

プロテスタント的想像

浄土真宗を高く評価した社会科学者



プロテスタンティズムの類比

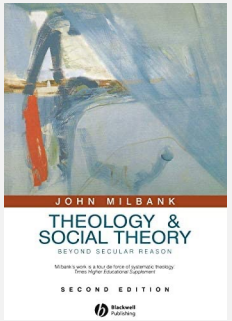
浄土真宗≒プロテスタンティズム？

- 政治学者の丸山眞男やベラーは、超越的な阿弥陀信仰とその信仰に支えられる自律性に注目。親鸞の思想とプロテスタンティズムの類似性を指摘。

→ 近代市民社会に適合的な宗教と捉える。「プロテスタント的想像」（Barshay 2019）。

近代の親鸞と
ポスト・モダンの親鸞

社会理論と「プロテスタント的想像」



「プロテスタント的想像」の再検討

- 1980年代以降の宗教の再活性化を社会理論がうまく捉えることができなかったのは、社会理論の宗教理解に問題があるのでは？

→学説史的研究の必要。

「プロテスタント的想像力」の喪失？

ベラーと大村に注目する理由

- 社会学者は、規範的な前提を帯びた社会理論を用いて、ある特定の宗教理解を擁護し、そして、その宗教理解を通じて、社会が抱えている問題——たとえば、ベラーであれば、アメリカ民主主義の問題——を捉えようとした。

- 大村はプロテスタント的理解を下敷きにした人間像では近代社会の病理から逃れられることができないと論じた 。

近代とポスト・モダンのあいだ

転換期としての1970年代

- 両者の研究の経歴に注目すると、親鸞への関心が1970年代を境に転換していることがわかる。

→二人が親鸞を論じた時代を比較すると、「プロテスタント的想像」が信憑性を持ち、有効性を発揮した時代とそうでない時代が明らかになる。

参考文献

- Barshay, Andrew E, 2019, “The Protestant Imagination: Robert Bellah, Maruyama Masao and the Study of Japanese Thought,” Matteo Bortolini ed. *The Anthem Companion to Robert N. Bellah*, London and New York: Anthem Press, 191-213.
- 近藤俊太郎，2021，『親鸞とマルクス主義』法藏館.
- 碧海寿広，2021，『考える親鸞』新潮社.
- 大澤絢子，2019，『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房.